

# 「見果てぬ夢」を訪ねて

## ラ・マンチャの舞台 現地報告

前文

今年セルバンテスの「ドン・キホーテ」出版からちょうど 400 年。スペインの各地では記念の行事が行われた。「見果てぬ夢」を追って、定年退職した熟年男が現地に飛んだ。ラ・マンチャの舞台の「いま」を報告する。

文：清水 武

写真：井部昌之

### ①アルカラ・デ・エナーレス

## 作者の生地 記念行事

ラ・マンチャ県のさる村、名は思いたくない村に、さほど前のことでもなく、槍か  
げに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷士が住ん  
でいた。(永田寛定訳・岩波文庫 以下の引用の全ても)

旅は東京でのひよんな出会いから始まった。9 月半ば、信濃町でスペインからの父娘と出  
会った。二人は福岡にいる親戚を訪ねてきたのだという。話が弾んできたころ、私が 10 月  
初めに、「ドン・キホーテ」出版 400 周年の取材のためにスペインを訪れる計画があること  
を伝えた。すると、娘のスサナさんが相好を崩して語りかけてきた。

「じゃあ、私の町に来なくちゃ。セルバンテス生誕の地よ。今、いろんな記念行事をして  
いてとてもにぎやかだワ」

「ラ・マンチャの舞台を訪ねて」——当初、旅はドン・キホーテの生まれ育ったという村  
から始めようと考えていた。物語の書き出しにある「思いたくない村」とはどこか？  
いくつもの村が“自分の村こそ”と名乗りをあげていて、いまだ定かではない。しょせん、  
物語のために設定された村。諸説のあるまま残しておいたほうが、夢が広がるというもの  
だろう。

一方、セルバンテスの生地は現実にその歴史と跡を継いでいる。そこで、彼女の思いが  
けない申し出に予定を変更、まずは“原点の町”アルカラ・デ・エナーレスを最初の目的  
地にした。

10 月 11 日。マドリッドから東へバスで約 30 分。街に入ると車道の両側にはカラーのエン  
ブレムがにぎやかに歓迎していた。「セルバンテスの『ドン・キホーテ』400 周年——作  
者の町：アルカラ・デ・エナーレス市議会」。

中央のセルバンテス広場へ行く。ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像の横にも大きな立看板がある。「記念期間：10月1日から12日まで」。

日本から持参した携帯電話でスサナさんに連絡を取ってみる。電話口に出たのは母親だった。「すみません。娘はまだ大学から帰っておらないんです・・・」

それじゃあ“自力”でと、屋台が並ぶ公園内を歩き始めた。木陰のベンチに座っている3人の老人に声をかけた。

「なに、ハポン(日本)から？そりゃまあ遠いところからよく来てくれたもんだ。で、もうセルバンテスの生家には行ったんかい？」

「まだ！？よっしゃ、じゃあワシが案内したるで・・・」

こう言って立ち上がった血色の良いおじいさん。町の各地を説明しながら案内を始めた。初めて会ったばかりの外国人にこの親切！ファン・モネデロさん(72)。マドリードの北方にあるグアダラハラ生まれ。アルカラに住んで38年になるという。

「どこにいたってワシは生粋のスペイン人なんだよ！」。大きな声に誇りをこめて言う。

セルバンテスの生家は400年の歴史をにおわす大きな2階建てだった。中庭を囲むように居間、食堂、寝室、家族また使用人の部屋があり、当時の生活用品がそのまま陳列されている。玄関前の歩道には、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像が置かれていて、観光客の記念スナップの場となっていた。

前日には、この地にあるスペインでは最も古い大学の一つ、1498年創立のアルカラ大学の講堂で、セルバンテス賞の授賞式も行われた。賞はスペイン語圏の作家にとって最高の榮譽である。これにはカルロス国王、ソフィア王妃、サパテロ首相も出席しその意義をとどめている。



信濃毎日新聞 2005年12月8日 夕刊5面

案内に感謝し帰りかけたところに、スサナさんの父親のカルロスさんが息せき切って駆け寄ってきた。「スサナがまだ大学から帰ってこないのでワシが代わりに来たんじゃよ」。額の汗をぬぐいながら握手を求めてきた。あごひげの豊かな61歳である。

セルバンテス広場とそこに通ずる道路は千人を超える人々でごった返していた。その中でよくぞわれわれを探し出してくれたものだ！世界は狭い！

清水 武 海外留学アドバイザー 1941年 上伊那郡箕輪町生まれ。高校教諭、新聞記者を経て年定年退職の2002年にはスペインのマラガ大学に留学。SO（スペシャルオリンピックス）長野大会にボランティア通訳として参加。東京都昭島市在住。

## ②マドリッド・スペイン広場

# 主人公を見守る作者

「人間寝てえるうちは、身分の高め者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」  
「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはないえ」

スペイン広場。マドリッド市内で最も人気のある観光スポットの一つである。大きな長方形の池を前にした広場中央の台座に、やりを掲げやせ馬ロシナンテに乗ったドン・キホーテとロバにまたがったサンチョ・パンサの像がある。その後方の高い台座には、作者セルバンテスが小説の主人公の二人を見守るように座っている。セルバンテス没後300年を記念して建てられた。



信濃毎日新聞 2005年12月15日 夕刊5面

新聞や雑誌、観光案内書などにあまりにも頻繁に出てくるシーンなので、ここは現在の写真の紹介だけにとどめよう。

ところで、なぜ私が「ドン・キホーテ」にこれほど強く魅せられているのかについて一言触れさせていただきたい。それは小学校（箕輪東小学校、

当時は村立東箕輪小学校）の6年生だったころ

までさかのぼる。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけだった。以来、その奇想天外なストーリーにひかれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものだ。

また10年ほど前、東京・信濃町の職場近くにある日本スペイン協会で、スペイン文学の権威・長南実先生による原書の勉強会があった。何とか時間をやりくりして、週一回、一

年余り出席した。さらに、歌舞伎俳優の松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で何回も観劇した。

ドン・キホーテもだが、サンチョ・パンサの言葉もいい。(別掲)

二人の間でやりとりされることわざは、実に示唆に富んでいる。正義を求め、悪と戦うためにやりを抱えて風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化ともいえる。

セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版した。その初版本の出版が1605年、マドリードで行われたのである。その印刷所もマドリードの街の一角に残っていた。建物の壁には二人を刻んだ彫像もある。

猪突猛進のドン・キホーテと優柔不断なハムレット。これにゲーテのファーストを加えて、西欧文学の三大主人公と呼ぶ人もいる。セルバンテスが没したのはくしくも「ハムレット」の作者シェクスピアと同じ1616年だった。作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されている。

物語は長編だがわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているとも言われている。

さて、現実の今のスペイン広場。観光客が池や像の前でにぎやかに代わるがわる記念撮影をしている。いつもと違う光景は、周囲が工事中のようにやや雑然となっていることだ。広場に沿った通りのキオスクの店員に尋ねてみた。

「そう、あれは地下鉄工事のための資材なんだ。世界からここに来てくれる観光客の皆さんには、ちょっと目障りだろうけど、もうしばらく我慢してもらうしかないだろうね。ドン・キホーテの時代から近代化へ。ここの交通渋滞を緩和してもらう取り組みも大切だしネ・・・」(海外留学アドバイザー、箕輪町出身)

### ③プエルト・ラピセ

## 「旅籠」はレストランに

ドン・キホーテは、街道宿を城砦、亭主を城主とおもいこんだから、城主の腰の低さがうれしかった。そこで、答えた。「城主どの、てまえには、なにも構うてくださるな。それ、**《身共の晴着はこの具足、身共の憩いはいくさごと》**でござるからな。」

片田舎の郷土に過ぎなかったドン・キホーテは“正義の戦い”を進めるために、思い姫と共に騎士の称号を得ることが必要だった。「早くその儀式をしてもらいたいものだ」。放浪の旅に出たドン・キホーテは、とある“城”を遠くに見つけた。

旅籠(はたご)を城と思い込んだドン・キホーテは、その城主(亭主)に向かって頼み込

んだ。

「お願いしたいことに快く承諾いただきたい。それというのは、明日かならず、てまえに帯甲の式を授けていただきたいことじゃ。そのため今夜、自分は城内の拝堂にこもり、甲冑(かっちゅう)を飾って、寝ずの番をする」と、井戸の上に甲冑を置き、夜中、不寝番をした後、城主より騎士への儀式を執り行ってもらおうのである。



信濃毎日新聞 2005年12月22日 夕刊5面

ラ・マンチャの鉄道の要衝アルカサル・デル・サンファンに宿を定め、まずはフェルト・ラピセへ。いや、その前にわれわれが泊まった宿「ホテル・コンベント・デ・サンタクララ」について一言。そこはかつての修道院(コンベント)をホテルに改装したものである。なるほど、建物全体の構造といい、窓のつくりといい、何世紀も前の面影を忍ばせて

ている。観光客に人気の国営ホテル「パラドール」の中にもかつて修道院だったホテルも多い。グラナダのアルハンブラ宮殿にあるパラドールなどは、人気が高く半年以上も前から予約しないと泊まれない。

アルカサル・デル・サンファンから西に約40キロ。タクシーの運転手ペドロの車でフェルト・ラピセの町を訪ねた。どこまでも広がるラ・マンチャの大平原。車は時速120キロ以上で走っている。でも、同じ光景が続いているせいかそれほど速く感じない。道路の両脇には赤土の荒地に縦横斜めに列の揃ったオリーブの畑が延びている。一部の地域では収穫の終わったばかりのブドウ畑が続く。日本のように柵はない。短い株からつるが伸び実をつける。

途中で一時停車。オリーブの近接写真を撮る。白い粉のようなかげりを被った緑色の実がたわわになっている。この収穫は大変だ。大きな木の実は棒で叩き落すのである。いまだに原始的な収穫法。機械でゆすり落とす方法もあるが、木そのものを傷めてしまうからという。一つの畑だけでも数千本。大変な作業量。そのため、海を渡ったアフリカのモロッコなどから大勢の季節労働者がやってくる、という。

車はフェルト・ラピセの「ベンタ・デル・キホーテ」の門の前で止まった。ここが、ドン・キホーテが“城”と思い込んで入った旅籠のモデルになった場所である。昔風の屋根のある門を歩いていくと、中庭の奥に井戸と馬に水を飲ませるための石の貯水池、その隣にやせたドン・キホーテの像が立っていた。さらにその奥は100人余を収容するレストラン。

中庭を囲む2階建ての家は、今は人を泊める状態にはなっていない。

午後2時。スペインではちょうど昼食の始まる時間だ。われわれもレストランに入る。と、20人ほどの日本人グループが。大型観光バスでやってくる一行は、ほとんど全員がカメラを手に写真を撮りまくり、土産品店では次々と買い物、食事も短時間でかっこむと一斉に風のごとく席を立ていく。ワインを飲みながら静かに懇談している何組かのヨーロッパ各国からの旅行者とはきわめて対照的だ。

観光地化したせいか予想外に高かった食事代を払うと、降りだした雨の中を車に戻った。中庭はきっと夜になったら、ドン・キホーテが不寝番をしたという情趣が出てくるのだろう。(海外留学アドバイザー、箕輪町出身)

#### ④カンポ・デ・クリプターナ

## 戦い挑んだ風車点在

この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこをみなさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が三十びき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう」

ペドロのタクシーでカンポ・デ・クリプターナの風車の並ぶ丘に上る。10基の風車が点在している。車から降りると風が冷たい。だが、今はどの風車も回っていない。かつては風力を利用し、粉ひきに活用していたものだが、現在は完全に観光用と化している。

ドン・キホーテはこの風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ。「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサが聞いた。「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「中には、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」「おめえ様、待ってくんないせえ」と、サンチョ。「あそこに見えるは巨人でねえ。」



信濃毎日新聞 2006年1月5日 夕刊5面

粉挽場の風車ですがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ、一ばん手前の風車に突いてかかった。すると、槍先がはねぎに触れると見えた時、にわかには吹き起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、やりはぶち折れ、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、野原をころがっていった——作品の全部を知らない人でもここだけは知っている。あまりにも有名なシーンである。

「ダダダダダ・・・・」

マウンテンバイクに乗った若者三人が、風車の並んだ凹凸の激しい坂道を駆け降りていく。丘の入り口の風車の一つが観光案内所になっていた。まだ午後4時なのに閉まっている。「きょうは祝日<イスパニアデー>だからお休み」という。

「なんということか、祝日だからこそ観光客も多く、そのアテンドをするのが当然ではないか」などといきり立つのは、あまりにもまじめな日本人的な考え方か。

同行したカメラマンの井部さんはあちこちを動き回り、アングルを変えている。私はその間、運転手のペドロと談論していた。太った気のいい69歳のペドロは言う。

「もう40年も運転してるよ。走った距離は100万キロを超えたかなあ。でも、今は仕事を息子に譲りつつあるんだ」

乗せてもらっているドイツ製のフォルクスワーゲンは2万ユーロ(約280万円)だった。高額な投資を回収するために、親子が時間交代でハンドルを握っているのだという。

夕方、風はさらに強く、雲行きもあやしくなってきた。風車がライトアップされた写真が撮れるまでと思ったが、風邪気味の井部氏のためホテルに戻る。

翌朝。雲ひとつない“ラ・マンチャ晴れ”。今度は観光案内所も開いていた。2人の女性スタッフが電話でやり取りをしている。受付の横には、松本幸四郎演ずる「ラ・マンチャの男」のポスターもはってあった。彼女たちの忙しい電話の合間を縫って質問する。

「そう、日本からの観光客が圧倒的に多いわね。シーズンには1日平均4台の大型バスがやってくるワ。その次はフランスそしてドイツかしら・・・・」

訪問ノートには、ぎっしりと日本人の署名もあった。どこまでも正義と理想を追い求めたドン・キホーテ——そんな生き方の一端をここにきた日本人もつかんでくれればよいがナ、なんて思いがふと込み上げてきた。(海外留学アドバイザー、箕輪町出身)

⑤エル・トボソ

## 54 カ国の翻訳本一堂に

この時、ドン・キホーテは、一つ大きな溜息をついて、こう答えた。「・・・姫の名はドゥルシネア、生国はラ・マンチャの一村なるエル・トボソ、身分は、手前の女王であり思い姫であるによって、すくなくも王族たるべく、美しさに至っては、詩人たちがその恋人をたゞえるに使う、世にありえぬ・・・」

その昔、トボソ村の村長は考えた。貧しいわが村はどうしたら栄えるだろうか。思案の末、思いついたのは、村が小説「ドン・キホーテ」の舞台であることだった。作品は聖書に次いで世界で最も多くの言語に翻訳されている。

「よし、世界中の『ドン・キホーテ』の翻訳書をここに集めて展示しよう」。村長はさっそくペンを取り、各国へ手紙を送った。

翻訳書は続々と届くようになった。国家元首、大統領、著名人の署名の入ったものも多かった。トボソ村は一躍、「ドン・キホーテ」愛読家の訪問地となり、国の内外から観光客が押し寄せられるようになった。“村起こし”運動はすばらしい結実を見たのである。

そのドン・キホーテ図書館を訪ねた。朝の早い時間ということもあって、他の訪問客もなく、館長自らが案内してくれた。

全部で54カ国語の「ドン・キホーテ」があるという。陳列棚には言語別の翻訳本とスペイン語による短い説明があった。米国のレーガン大統領、英国のサッチャー首相、フランスのミッテラン大統領、ポーランドのワレサ大統領、南アフリカのマンデラ大統領など。中にはイタリアのムソリーニからのものもあり、歴史の一段面をのぞかせている。



信濃毎日新聞 2006年1月12日 夕刊5面

ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ヒンディ語、ベトナム語、トルコ語、エスペラント等もある。数日前には、南米のエクアドルからケチュア語で翻訳されたものが届いたという。

日本語の訳本は2階の一角の展示棚。1927年の高田早苗による訳本だった。

私は館長に、ほかの訳者による本もある、と説明。



「ええ、私も訳者の名前は知っています。でも展示場所がないので別途に保管しているんです」。こちらが記者とカメラマンと知った館長は「ところで村長にお会いになりますか？」と誘ってくれた。思いがけず、由緒ある村の村長に会えるなんてこんなラッキーなことはない。

「ええ、ぜひお願いします！」

すぐ近くの庁舎の村長室で村長のナティビダー・マルチネスさんに会った。ジーンズにジャンパー姿の女性村長は、完全な仕事スタイルでテキパキと動く名村長とみた。村の歴史、訪れる観光客、日本の最新事情等について話が弾んだ。

そこから 100 メートル先にはドルシネアの生家があった。ドン・キホーテは粗野な田舎娘アルドンサを高貴な淑女ドルシネアに仕立て上げた。正義の戦の報告をするためである。家は 400 年前からの農家。農具、家具、調度品などもある。エル・トボソの中央広場にはドルシネアにうやうやしくひざまづいているドン・キホーテの彫像もある。

「ドン・キホーテ」はフィクションの小説である。でもその舞台が今、いろんな意義付けがされ世界中から見学者がやってきている。ここでも「最も多いのは日本人です」という。

ひとまずわれわれの旅も終えた。作品の舞台で多くの市民とも対話を重ねた。スペインの学校でも「ドン・キホーテ」がほぼ必須の教材となっている。でも、私の会ったスペイン人で前編と後編を読み通したという人は極めて少なかった。今からすれば古典で、現代スペイン語とも違い難しいのかもしれない。

そのなかでの日本人の「ドン・キホーテ」への関心の高さ。それはこっけいな冒険譚もさることながら、狂気と言われながらも理想に向かって突き進む主人公のどこかにひかれるものがあるからではないか。特に未来に夢を描くことが難しい現代の日本の社会にあっては・・・。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——セルバンテス（ミュージカル「ラ・マンチャの男」＜森岩雄・高田蓉子訳＞より）（海外留学アドバイザー、箕輪町出身）

（完）